マット運動の採点と技能水準との関係について

藤　田　明　男（千葉敬愛短期大学）

〈目　的〉

初等教育専攻学生を対象として、マット運動における採点傾向と技能水準との関係について検討した。

〈研究方法〉

1. 被験者　　本学男子学生（N＝２５）
2. 測定日　　昭和５５年１２月４日正課授業時
3. 採点課題　　伸膝前転、倒立前転、後転倒立及び前方倒立回転の４種目
4. 方　法　　被験者全員に採点用紙を配付した後、全員が演技者となり、上記課題を１人づつ演技し、直ちに各被験者が採点を行った。

点数は、１００点満点とし、０～１００点までの範囲内で自由に採点させた。尚、その際他人の採点を絶対に見ないよう指示した。

〈結　果〉

４つの課題に対して採点された点数を合計し、４で除したものを各被験者の得点とした。

筆者の採点値をｃｒｉｔｅｒｉａとし、各被験者に与えられた得点を被験者数で除したもの。つまり被験者群の採点の平均値との相関を求めたのが図１である。

その結果、非常に高い値を得た。(r＝.967)

そこで、ｃｒｉｔｅｒｉａの得点に基づき、被験者群から上位、下位２５％づつを抽出し、それぞれを上位群（Ｈ－Ｇ）、下位群（Ｌ－Ｇ）とした。

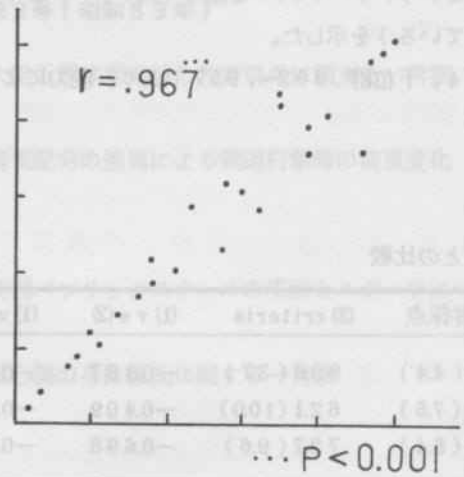

図１．ｃｒｉｔｅｒｉａと被験者群の採点との関係

表1. criteriaによる群間の能力の比較

G	N	$\overline{X}$	S.D	t
(1) H−G	6	83.6	3.5	4.748 …
(2) L−G	7	62.1	10.0	

$p < 0.001$

表1.は、与えられた得点の群間の比較である。群間には0.1％水準で有意な差がみられた。つまり、この2つの群は、明らかにマット運動の能力において異なる集団である。

全体群の平均値（標準偏差）は、72.7（9.6）であった。

イ）採点の甘辛について

表2. 群間の採点値の比較

G	N	$\overline{X}$	S.D	t
(1) H−G	6	68.4	6.2	−2.023
(2) L−G	7	73.8	1.8	

表2.は、群間の採点値の高さの比較である。全体群の平均値（標準偏差）は、それぞれ72.3（8.4）でcriteriaとの差の検定は$t=1.637$で有意な差はなかった。

表2から、群間には、統計的には有意な差はみられなかったが、上位群の方が採点が低い、つまり採点が辛い傾向がみられた。また、criteriaとの相関は$rs=-.369$であった。

ロ）採点の一致度について

各被験者の採点とcriteriaとの相関は、前出のとおり、$r=.967$と極めて高い。つまり採点の高さに係りなく、同様な採点傾向（順位づけが一致している）を示した。

各群の相関係数のRangeは、上位群.877〜.974、下位群.902〜.957であり、能力による採点傾向の差はみられなかった。

ハ）自己採点について

表3. 自己採点、他者採点及びcriteriaとの比較

G	N	(1)自己採点	(2)他者採点	(3) criteria	(1) vs (2)	(1) vs (3)
(1) H−G	6	80.6（10.7）	82.5（4.4）	83.6（3.7）	−0.367	−0.593
(2) L−G	7	61.3（15.0）	64.1（7.5）	62.1（10.0）	−0.409	−0.108
(3) COM−G	25	70.2（12.1）	72.3（8.4）	72.7（9.6）	−0.698	−0.793

表3は、自己採点と他者採点及びcriteriaとの関係を検討したものであるが、能力上位群、下位群を問わず、本被験者群は、ほぼ妥当な自己採点を示した。